

## 編 集 後 記

21世紀の到来と歩調を合わせるようにして、ここに、学術雑誌『旭川医科大学研究フォーラム』創刊号が刊行のはこびとなった。旭川医科大学における研究と教育の「今」が、学内外の読者諸賢に的確に伝われば、まずは成功である。

久保学長の発刊の辞にも少し触れているが、ここで改めて、本誌刊行に至るまでの経緯を説明しておこう。本学は、過去21年にわたって、年刊学術雑誌『旭川医科大学紀要』を発行してきた。とはいえ、これには例年、一般教育の、主として人文・社会・外国語・非実験系自然科学担当教官の無査読論文のみが収録され、しかも、編集・刊行のための正式な委員会は存在しなかった。これではもはや学内外の点検・評価には耐え得ないとする危機意識が、昨年、一般教育教官の一部にめばえた。また、同じ頃、新設の看護学科の教官の一部からは、自分たちも紀要の執筆に参加したいとする声が寄せられた。その一方で、医学部の中核をなす基礎・臨床医学の教官からは同誌がほとんど顧みられていないのも問題であった。

以上の点をすべて踏まえ、本年5月の教授会では、同誌を査読制度のある全学的規模の学術雑誌に発展させて正式な委員会が編集・刊行すべし、とする方針が決定された。新しい雑誌の名称を「旭川医科大学研究フォーラム」と定め、ただちに、7名からなる編集委員会が発足した。

この委員会で決められた本誌の刊行目的と編集方針は、奥付のページに示したとおりであるが、本誌の内容上の特色を詳しく示せば、以下のとおりである。

投稿論文は、いうまでもなく、学内外の点検・評価に耐え得る水準に達しているものでなければ掲載に値しない。そこで、査読制度を設け、学外の専門家に厳格な査読をお願いした。今回の投稿は一般教育および看護学科所属の若手教官に偏ったが、次号以降では全学的な投稿を期待したい。

依頼論文A（総説）は、おもに本学のベテラン専任教官、とりわけ基礎医学・臨床医学の教官に、現在の研究内容について、わかりやすく興味深く語っていただくもので、広汎な医学医療従事者の生涯学習の教材としても活用できる論文である。なお、これには、本学が昨年3月から月1回開催している「旭川医科大学フォーラム」での講演内容を基にしたものも含まれている。

依頼論文B（教育関係の提言・報告など）は、主として教育を論ずる場である。昨今、日本の初等・中等教育は大きく様変わりし、その影響で、大学の教育現場も新たな模索を余儀なくされている。本学でも、学生の自学自習を促すチュートリアル教育をはじめ、さまざまな新しい試みが展開されている。そうした教育現場の現状や課題にかんする提言などを、教官に縦横に語っていただくのがこのコーナーである。次号以降では、ひとつのテーマをめぐる学内の賛成論・反対論を併載するなどして、活発な論争が展開されるように編集委員会が積極的に仕掛けていきたい。

全国的規模あるいは国際的規模の学会を主催された本学の教官には、その学会の成果と今後の展望をまとめていただくことにした。それが「学界の動向」の欄である。

本学教官が執筆した書籍を紹介するページも設けた。今後の読書活動・教育活動の参考にしていただければ幸甚である。

さらに、ややもすると堅苦しくなりがちな論文だけでなく、本学名誉教授による格調高いエッセイなど、肩の凝らない文章も毎回収録していく所存である。創刊号のエッセイは、傘寿を過ぎてなお矍鑠として御活躍中の黒田元学長をお願いした。

今後は、特集記事を企画したり、医療関係の最新のキーワードを解説するページを設けたりもしていきたい。また、医学・医療には直接関係のない分野の論文も、積極的に掲載していく所存である。読者各位には、今後の一層の御支援をお願いしたい。また、忌憚のない御意見・御感想を、編集委員会宛てにお知らせくだされば幸甚である。次号以降に積極的に反映させていきたい。

本誌刊行までには、原稿の執筆や査読を快諾された学内外の諸先生をはじめ、多くの方々に多大な御尽力を賜った。末尾ながら厚くお礼申し上げる。印刷・製本で御苦勞をお掛けした旭川印刷工業(株)の各位にも、厚くお礼申し上げる。

平成12年11月

近藤 均（編集委員会副委員長）